
恋獄-レンゴク-

神屢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋獄 - レンゴク -

【Nコード】

N5511H

【作者名】

神屢

【あらすじ】

幼馴染だった人間に告白された隗。俺は男、幼馴染も男。一度の契りにより、男との恋愛に興味がなかったが興味を持つようになった。人生が変わってしまった隗に待ち受けている事とは？

これが始まり（前書き）

これはBLです。少しでも無理だな、と思ったら読むのをやめましょう。

これが始まり

「好きなんだけど」

俺にそう言っただけで来たのは、幼馴染の『男』。

「何がしたいんだよ……」

「お前とやりたい」

……わけわかんねえな。

「意味不明だ、俺とお前はただの幼馴染だ」

「それをぶち壊すために俺は告白した、恋人になりたいんだよ」

話にならない……。

「な？一発やるだけでいいんだ、そうしたら諦める」

「正気か？」

「ああ、お願いだ」

「俺はそんな趣味は……」

「まだしてないのにわからないだろう？」

幼馴染が俺に恋心をよせていたなんて知らなかったし、そういう気

あつたんだって事も知らなかった。

でも、大切な幼馴染。

悲しませたくない……。

そんな趣味はないけれど、まあ途中で萎えるって事もあるだろう。

「……ヤツたら、幼馴染に戻れるか？」

「うん」

「また、仲良くできるんだな？」

「ああ、約束する…… だから……」

「わかった……」

高浪 たかなみ 隼 かい、学生。

これが、BLにハマるきっかけであった。

「これが始まり」(後書き)

感想 お待ちしております。

こついうBLダメだな、と思ったら。軽いBLの物語「天と地の結び方」をどうぞ。

幼馴染（前書き）

これはBLです。今回 刺激的なシーンがあるので苦手な人はやめ
まじょう。

幼馴染

高校2年のとき。

初めて男とヤツた。

しかも……幼馴染。

俺は『そんなこと』に興味がなかった。幼馴染が告白なんて俺にしなかつたらこんな事にはならなかったのに……。こんな事というのは、俺が男とやるのにハマッてしまったという事……。

そして、女の子に興味がなくなった。そのかわり、男に恋をするようになってしまった。

それは一年経つても変わらなかった。

今、俺は高校3年生。

幼馴染とは、やる仲。

幼馴染の事が好きと言う訳ではなく。ただ、やりたいただけ。俺には好きな人がいる。もちろん男の。

普通、ホモなんて受け入れてくれないし、恋が叶う訳がない。だからそのストレスを、幼馴染とヤツて解消している。

「なー、隗 ヤるうか」

「相威……」

相威というのは幼馴染の名前で、フルネームは秋戸^{あきと}相威^{さけい}。週に2、3回。

こうして俺の家に来て、ヤりにくる。

俺は一人暮らしだから邪魔するやついないし。

「いいのか？隗」

「ああ…… したいし」

相威に好きな人がいる事は言っていない。

萎えるだろうし、今の関係が崩れそうだし。

たぶん…… 相威は俺が相威の事好きなんだと思ってるだろうし。

(つまり、両想いつて思ってるってことだ)

それに相威くらいいしか、ヤれる男がいないし。相威が俺の顎を持ち上げる。

「隗、俺の事好き？」

「……………なんて言ったらいいんだろう。」

「……………ヤリたい」

「質問の答えになってない」

急にどうしたんだか…………… 目が本気だ。

何かの勘が働いたのか……………？

「もう一回言っけど、好き？」

確かにやるのは最高だけど、心は別に相威に動いていない。

「好きじゃなかったら？」

「好きじゃないのか……………」

萎えたか……………？

でも、相威が顎を持ち上げてる手が離されることはなかった。

「俺、本気でお前が好きなんだ」

「……………ああ」

「俺、頑張るから 好きになってよ……………」

「頑張り次第……………」

そう言った瞬間、口を塞がれた。

「……………んっ……………」

舌を入れられ、俺の舌と絡めさせる。

息ができないほど俺の口腔（こうくわう）を舌で荒らされる。

「くっ…………… 相威…息……………」

「やりすぎたか？」

舌を抜かれ、唇を離されると 俺の口の端から唾液が流れる。相威

はそれを舐めると、服の中に手を入れてきた。

「相威！ だめっ……………っ……………」

「お前って外見攻めだけど受けなんだよな」

「……………っ……………」

胸の突起をいじられるのは嫌じゃない。でも、変な声がでてしまう。

「相…威……」

「下が辛いかな？なら、そっちのがいいか」

手が下に移動する。

その手は容赦なく俺の自身を包み込み、上下に動かしてくる。

「ん…はっ……」

快感に負けてしまい、すぐにイってしまった。

白濁が相威の服を汚す。

「隗…… 好きになってくれよ……」

すごく切なく聞こえた。

ああ…… 本当に好きになれるんだろうか。

いつまでこんな関係が続くのだろう……。

相威のそれが俺の体内に入られると、俺の意識はどんどん遠くなつていった。

目を開けると、相威の姿はなかった。

時間は「AM1:24」

帰ったのか……。

「好きになれるのか……？」

俺の好きな人は、俺の友達。

相威の好きな人は、幼馴染の俺。

友達と幼馴染は違う。

幼馴染を恋愛対象に見ることは、俺にとっては難しい。

「なれねえよ……」

でも、好きじゃないのにやるっていうのも変だしな。

変っていうか、セフレって感じか。

相威にはだいたい悪いことしてるんだな…… 俺。

好きな人の事は言いたい。心はそう言ってる。

でも、体は？

やれなくなるのは嫌だ。そう……

俺の体は想像以上にハマッていたのだった。
「どろすりゃいいんだよ……」

幼馴染（後書き）

今回、あれなシーンがありましたね。うまくかけたんだか； あんまりやりすぎるとR18なのであんな感じで。次回、隼の好きな人が登場します。幼馴染との関係も注目していただきたい。感想お待ちしております。

恋心

「隗！」

その言葉で、ハッと目が覚めた。

ここは学校……ということは、授業中寝てしまったらしい。

「あー……よく寝たよく寝た」

さっき名前を呼んでくれたのは俺の好きな人。

名前は坂宮さかみや黎れい。

「お前なあ……『よく寝たよく寝た』じゃない！何寝てるんだ 授業もう全部終わってしまったんだぞ！勉強に支障がでる」

「うーん」

欠伸あくびをしながら帰りの準備をする。

ついでに、黎と俺は同じクラスだ。

そして……相威とも……。

黎とは学校でよく話すが（まあ、仲がいい）、相威とは学校では必要以上の事は話さない。

なんでかって？話すと夜のことを思い出しギクシャクしてしまうからだ。俺が。

「隗 ノート写さなかったんだろ？俺の写すか？」

黎は優しい。そして真面目で、努力家。

そんな所が、俺は大好きなのだ……。

「ああ！貸してくれ！」

「まったく……次はちゃんと起きて授業を受ける！」

「わかったよ で、どこからどこまでだ？」

「ここから……」

！

相威が、俺に……近づいてくる……！？

机の上に黎のノートと同じ内容が書かれたノートが置かれる。

「俺の見るよ」

何言ってるんだこいつ!!??

「相威！隗には俺のを見せてるんだ お前のはいらないぞ」

「なんだよ！別に俺のでもいいんだろ？」

急に出て来てなんなんだよ……

「あの……さ 相威 俺には黎のがあるか」

『俺には黎のがあるから』そう最後まで言い切ろうとした時、相威が何とも言えないような切ない雰囲気な顔をしてきた。

(相威のヤツ……何て顔してるんだよ！)

「隗の言う通りだ 俺のがある 嫉妬はやめてもらおうか」

「嫉妬!？」

思わず叫んでしまった。

(嫉妬って…… 黎！何言ってるんだ!?)

「わかってるんなら俺のでいいだろ 黎、ノートをどかせ」

「お前の都合通りになるかよ、俺が先に見せてるんだ」

二人の顔は、まるで龍と虎のように怖い顔をしていた。

(なんで怒ってるんだ!?)

「黎、話がある ちよつとこい」

「ああ、相威 俺も話がある」

そう言うと二人は教室を出て行った……。

(そもそも…二人って話したことあったのか?)

隗が教室に待っている間、二人は屋上にいた。

「お前さ 隗の事…好きなんだろ？」

「意味が分からん」

「しらばっくれるな」

「……………」

「黎？お前耳あるか？」

「……………お前はどうなんだ」

「好きだよ 前言っただろ？」俺は隗の事が好きだからお前が恋敵ライバルになることなんてないように『ってな」

「……………」
相威は、黎と隗がすごくと言ってもいいほど仲がよく、よく喋っているのも、もしかしたらと思ひ、黎にそう忠告（？）をしておいたのだった。

そう、相威は、隗が黎の事が好きだと悟ったのではなく、黎が隗の事を好きだと悟ったのだった。

だから隗に前日、黎の事が好きなのかどうかを知るため「俺の事好き？」と聞いて好きな人がいるかどうかを探ろうとしたのだった。そもそも相威は隗が自分に好意があるなんて思っていない。隗が自分に「好き」と言った事がないからだ。普通に喋っているときも、ヤツているときも……………」

黎が黙っている間、相威が色々考えていると、黎が口を開いた。

「付き合ってるのか？」

「……………」

さっきの黎のように相威が黙る。

「お前こそ耳があるのか」

「付き合っていない……………でも……………」

「なら問題はないな？お前の忠告なんて俺には関係ない」

「やっぱ好きなのかよ……………！」

「悪いのか？何か問題でもあるか？……………で、でものはきはなんだ？」
相威がニヤツと笑う。

「俺と隗はヤツた事がある」

「……………！？」

「それも何回もだ！」

自信満々に相威は言うが、次の黎の言葉でその自信は消えていく。

「好意があつての行為か？」

「ば……………バツカじゃねーの？シヤレかよ……………」

ハハハと笑って誤魔化しているが、黎にそれは効かない。

「じゃあ俺が隗にヤろうと誘えば……どうなる？」

「……………」

「できるんじゃないのか？誰とでも」

「そんなことっ！ないんじゃないかねえの……………」

「じゃあやってみようか？」

相威は薄々勘づいていた。

隗は、やれるのなら誰とでもいいんじゃないか？男でそういうヤツ
がないから俺とヤツているんじゃないかと。

まあ隗は黎の事が好きだから黎とはもちろんヤれる訳だが。

「じゃあ 相威か俺かを隗にハッキリさせてもらおうか」

「どうやってだよ！」

「告白をすればわかるだろ」

「はあ？どうやって……………」

「今日はもう授業ないからな、二人で同時に体育館裏ぐらいの場所
で告白すればいいだろ」

「はあ！何言ってるんだよ！嫌に決まってるんだろ！」

「なんでだ？お前らはヤツた事があるんだろ？有利だろう？さっき
自信満々に言ってただろう」

可能性のない勝負を受けたくない…………… 相威はそう思い断ったが、

黎の言葉で事情が変わった。

「俺はフられたら、諦める」

黎が諦めるのなら話は別だ。それに、隗は黎の事をきつと友達とし
か思っていないはず！！そう勝手に思い、相威はOKを出してしま
った。

「ふーん……………約束だからな？じゃあ早速隗を呼ぼうじゃねえか！こ
こに……………」

「あ……………」

「待ってるよ？呼びに行ってくるからよ！」

「なぜお前がそんな上機嫌だかはわからんが、逃げも隠れもせずに
待っている」

「お前の落ち込む姿が早く見たいよ」

「同感だ、同じ言葉を返してやる」

相威はムツとしながら隗を呼びに行った。

自分だけが落ち込むと言う事を知らずに……。

恋心（後書き）

今回は刺激シーンはありません。

なんだか無理矢理な感じだったでしょう？

まさかの両想い……！

相威がどうなるのか、隗と黎は無事付き合えるのか？ぜひ次回も読んでほしいです。

感想、希望などよろしくお願いします。

結果（前書き）

今回刺激シーンがあります。苦手な方は戻ってください。

結果

20分程時間が経ち、教室に相威が帰ってきた。

「隗！ちよつと屋上来てくれねえかな？」

「……………いいけど…黎はどこに？」

「屋上」

（何する気だよ……………）

早々と屋上に来て見ると、本当に黎がいた。

「……………早かったな」

「さあ言うぞ？怖くなって逃げんなよ！

「お前こそ」

二人は何を話していたのか、何をする気なのか、さっぱりわからない。

「先行が有利とかあるのかな……………」

「隗の気持ち次第だ　じゃあ言わせてもらっ

「ふざけっ……………！同時でいくぞ！」

なんか……………永遠に続きそうな勢い……………。

「二人は何を……………」

「好きです　付き合ってください」

「お前の事が好きだ　付き合ってほしい」

は！？

「相威、お前俺より先に言っただろ」

「早い者勝ちだ！」

「はあ？」

「ちよ……………ちよつと待て……………何が……………」

隗には何がなんだかさっぱりだった。

（急に告白！！？？？）

しかも……………黎が俺の事を？

「告白だよ　なあ、幼馴染と友達……………どっちだ？」

「相威！お前には前言ったとおりだ！」

「マジか……」

相威はこうなる事を予想していたが、少しは落ち込んだ。そして、楽しみにしていた。

黎がフられる所を。

「隗 俺はどうなるんだ……」

「えっと……」

（フツた幼馴染の前でOKを……？つか、OKってどうやって言うんだ！？）

「隗」

黎が俺を好き……。そして……

「俺も、黎が好き」

自然と言ってしまった……！

「はあ！！??」

そう驚いたのは相威だった。

「相威、そういう訳だ 隗は俺のもの」

「認められねーよ！なんだよ、隗！ずっと黎の事好きだったのかよ！？」

相威が怒っている……。当たり前か？

「……そうだよ、相威」

「じゃあそれを隠してまでやりたかったのかよ！？」

「！？」

何言っただ……。！黎の前なのに……！

「うるさいぞ！」

「黎……」

黎が止めてくれた。でも、相威は続けて言うてくる。

「なんだよ！黎！お前悔しいだろ？自分じゃないヤツとヤツた事あるなんてさ、もう諦め……」

「諦めるわけがない、俺はそれでも隗が好きだ！ その気持ちは変わらない！お前は負けたんだ！」

「そんな……………」

黎…………。そんなに俺の事想ってくれてたのか。そう思うと目が霞んできた。

そして相威は、俺に目を合わせずに帰っていった。

「隗 黙っててごめんな」

「いいよ 俺も黙ってたし」

「ありがとう」

黎は俺の事が好き…………。その言葉が隗の頭の中でグルグルと回る。

「俺と付き合えて嬉しい？」

黎の問いかけ。答えはもちろん

「嬉しい……………」

「俺もだよ」

そう言くと、黎は隗にキスをしてきた。

「ヤツていい？」

「黎が…………いいなら……………」

黎はニコツと笑い、屋上の鍵を閉めた。

「ん……………」

黎が絡めてくる舌が熱い。唾液が混ざり合い、くちゅくちゅと言っ音が鳴る。

「ふっ…………あ……………」

「キスするだけで胸がもうこんなか」

キスをするのをやめると、胸の突起を愛撫してきた。

「っ…………や…………ん……………」

「可愛い声を出すんだな」

クスクスと笑いながら、今度は突起をつねってきた。

「出させてるのは…………っく……………」

「俺だったな」

「黎……………」

「ん？」

下が辛い。そう訴えるように、黎の目を見た。

「ああ、俺もだけど……………」

自身をズボンから取り出され、先端をいじってきた。

「あ……………あつ……………黎……………」

「不満か？じゃあ……………」

「不満じゃな……………あん……………」

自身が黎の口腔に包まれ、甘い声が喉からでる。

舌が動かされ、欲望が膨らむ。

「れつ……………黎！イ……………」

「いいよ？イッて？」

「あ……………ああ……………ん……………」

欲望から出た白濁は、黎にゴクリと飲まれた。

「何やって！？」

「飲んだ」

「は……………恥ずかし……………！」

言い切る前に急に脚を曲げられた。

「じゃあ、今度は俺の番」

「黎！？」

自身の先端から出ているぬるっとしたものを指ですくい取られ、隗の中に入れてきた。

「んつ……………く……………」

ゆっくりと抜き差しが続けられる。

「っもっ……………」

「俺も限界」

「っあ……………っ……………」

黎のが隗の中に入ってくる。

それはとても熱かった。

「黎……………熱い……………」

「隗もな」

「黎………？」

「何？」

「だ…大好きい………」

「俺も好きだ」

額に優しいキスをされ、それを奥に入れられた。

「んああ………」

「今日、後3回やろうか」

「えっ！？黎！？あっ………」

こうして隗と黎は、無事付き合っことができ、この後黎の言ったとおりになったのだった……。

結果（後書き）

……いいのかな。うん。

うまく書けた気がしない！初々しいな・前より長く書いたけど……。

まあ本来BL小説は18禁に分類されないのでもいいかなと。

今後、相威がどうするのか？とか、黎とは幸せに？とか、物語はまだ続きますので、次回を楽しみにしてくださいと嬉しいです。

感想お待ちしております。

相威の決意（前書き）

今回は相威の話です。天と黎はでないのをご注意を。

相威の決意

屋上から出て行った相威はまっすぐと家に帰る事にした。

(図書館に行っても別に気が休まる訳ないし、どっかの店でも同じようなもんだろ……)

とにかく相威は、感情を止めたかった。

天が他の人と付き合うという悲しみ。

天が黎の告白を受け入れた怒り。

相威の頭の中はグチャグチャだった。天と黎の事しか考えられない。別に話せないわけではなく、幼馴染だし話そうと思えば話せると思うが、誰かと付き合ってる好きな人とわざわざ話す気はない。

イライラしていると、自然と公園に来ていた。

「誰もいないな まあ、ちょうどいいか」

少しは気持ちの整理ができるかもしれないと、ブランコに乗る。

懐かしみながらブランコを動かす。

「そういえば、天と一緒によく公園のブランコで遊んだっけか……」

…

楽しかったあの頃。嫌なことなんか全然なかったあの頃。

昔の思い出を思い出すと、涙が出てきた。

「好きにならなきゃ、よかったのかな……」

そう呟くと、後ろから足音が聞こえてきた。

確実にこっちに向かっている。

「誰だ！」

振り向くとそこには、いかにもサラリーマンらしい姿の男性がいた。年は20〜30ぐらいだろう。

「あなたこそ誰です？少年 今は7時ですよ、公園で何を？」

「関係ねえな、ほつといてくれ！」

「少し愚痴を聞いてはくれませんか？」

「は？野良犬にでも言ってるよ」

「まあそう怒らないで」

サラリーマンは、相威の隣のブランコに座ってきた。

「お前、サラリーマン？」

「公務員をやってます」

「年は？」

「秘密です」

（何だこいつは……）

「愚痴ってなんだよ」

「聞いてくださるんですね」

「暇だからな」

そう言うと公務員は、深呼吸をした後、笑顔で言ってきた。

「今日、離婚したんです」

「……………!？」

（なにを急に告白してんだ！）

「妻が浮気をしまして、俺じゃなくてそっちを選んだんです」

「住むとこ妻にとられたか？」

「一軒家があるんですが、俺の家になりました 一人でのいるのも寂

しいので、近くの公園にでもいようかと」

「ここか 公園で一人も寂しくないか？」

「あなたがいたから来たんです」

「へえ……………」

「でも、仕方がないんです 俺金持ちじゃないし、顔悪いし」

（相手が金持ちでルックスが良かったのか）

「そんなことねえよ 金は知らないけど、ルックスは別に悪くないし」

「ありがとうございます」

「それに 今のお前の気持ち、わかるような……………」

たぶん大切な人が、他の人のものになるという複雑で辛い気持ちだろう。

「え!?! 離婚ですか？」

「離婚じゃねえけどよ!」

「ああ、よかつたら話してくれませんか?」
相変わらずの笑顔で聞いてくる。

相威は笑顔に負け、話すことにした。

「……実は」

今日の放課後のことを話した。

そして、「その人」が男という事も。

「そうだったんですね……」

「でも おかしいだろ? 男なんて」

「恋愛は自由ですよ」

「でも、世間が許さないし」

「男に恋をしたのは事実でしょう? 恋愛なんて心の問題です 世間を考えるとたら辛いですよ?」

相威の目から涙が出た。

「あれ……」

「どうしましたか?」

「知るかよ」

なぜか涙が止まらなかった。話したせいで思い出して辛くなったの
だろうか。

「学生さん」

「……なんだよ」

「俺の家に来ませんか? 徒歩5分ですよ?」

「なにする気だ」

「お互い傷を舐めあいましょう?」

「……」

「ダメですか?」

「忘れさせてくれるか?」

「一瞬かも知れませんがね」

「つ……れて……け」

「はい」

そう言った後、公務員は笑顔で手をつないできた。

その手に温もりを感じる。

「俺、攻めだけど……」

「そうですか？たまには変えましょうよ」

「お前攻めか」

「バリバリの攻めです」

「ニッコリ言うな！」

目覚めると、そこには見慣れない景色があった。

そういえば、ヤツたのか……。

「どうでした？」

「受けでか？ まあな」

「俺と付き合いませんか？」

「は？」

「とりあえず、連絡先をどうぞ」

「赤外線でもいいだろ」

お互いの連絡先を送信しあう。

「相威って言うんですね」

「お前は？席替え線でアドレスと電話番号しかないぞ」

「付き合い合ってくれたらいいですよ？」

「付き合い合ってやるから言え！」

「瀬名 蓮れんです、もう一回ヤツせなていいですか？」

「別に」

「好きですよ、相威さん」

「俺もそうかもな……」

相威は決めた。天のことは忘れよう……、そして、蓮れんを好きになること。

相威の決意（後書き）

運命の出会いというか、まさかの出会い？

ベタだったかな；

結構謎の人、蓮さん登場です。

今回も感想、どうかよろしくお願いします！

キャラ、新キャラの感想もよかったらお願いします！

風邪引き

黎とヤツた翌日。

俺は体調を崩してしまった、頭が痛い。

体温計から音が出る。

「38.9度!？」

どつりで頭が痛いはずだ……。

俺は平熱が高いため、普段は熱が出てもただだるいだけなのだが、今回はさすがに頭が痛い。

「はぁ……学校休まなきゃか」

とてもだるそうに学校に電話する。

「あ……もしもし、3年4組の高浪隼です 今日、急に熱が出て……欠席を……」

「なんだ お前元気だけがとりえだろ？」

受話器から聞こえてくる声は担任の声だった。

「は……はは、元気だけがとりえでも熱がでたんですよ」
苦笑いで答える。

「それにしてもお前前の授業で寝て」

「ゲツホゴホ……なんか咳ひどいんで、じゃあ」

「おい!高な……」

受話器を力いっぱい元の場所に戻す。

「まったく、頭の固い担任だ」

寝た俺が悪いのだが。

「にしてもどうするか、一人暮らしてこついう時困るなあ……」
親と一緒に暮らしていれば、卵粥とか作ってくれたりするのに。
そう切なく思いながら、布団の中にもぐる。
にしても

「寝れない」

頭痛いと寝れないのか。普段痛くないからその分辛い。

でも、寝ないと治らない……たぶん。

「よし、氷だ氷 氷枕作ろう！」

そう立ち上がった瞬間、めまいが襲ってきた。

「な……なんだこれ」

目の前が真っ暗になり、体に力が入らなくなる。

ピンポーン ピンポーン ピンポーン……

ガンツ！

「はっ！」

誰かがドアを蹴ったらしい。

「誰だ……？」

すぐに出ようとしたが、この格好ねまきでいいのか…？

でも、ドアを蹴るって事は急ぎだろうし。

「はい！」

思い切ってドアを開けると、夕日を背景にした黎がいた。

「れ……黎！」

（最悪だ！確認してから開ければよかった！）

「隗、大丈夫か？」

「ああ、うん、まあ」

「どうした？顔赤いぞ？」

（そりゃあこの格好だし……）

「なんで住所知ってるんだ？」

「担任から聞いた」

（う……嬉しい！）

「何急にやけてんだ？」

「嬉しいから」

（言ってしまった！）

「……！素直だな、熱だと」

どうしよう、どうしよう、どうしよう。

頭の中でその言葉がどんどん出てくる。

「黙ってるって事は、頭痛くて辛いかな？来て悪かったな　じゃあ寝て……」

「いや！なんか今軽くだるいだけなんで！大丈夫なんで、まだ居てくれ！」

「本当に素直だな　で、ちゃんと寝てたか？」

「寝てた……」

倒れたんだけど、寝てたに入るだろ。

そっぴいえば腹減ったな……。何も食べてないんだっけ。

「そうか、で、何か食べたか？」

考えていたことを言われ、頭の中に返す言葉が出てこない。

「あつ、えつと、ああ」

「何言ってるんだ？つか、食べてないだろ？」

「うん……」

「じゃあ夕飯は俺が作る、医者行ってないのか？つつつても、そんな元気ないか」

「でも、悪いし……」

「いいよ、恋人なんだし」

顔がカアツと熱くなる。サラツと言われると照れてしまう。

「じゃあ、布団の中にも入ってる」

「わかった」

布団の所に向かおうとするが、まためまいが隗を襲う。

「うっ……」

「大丈夫か！？」

倒れるギリギリの所で、黎に支えられた。

「大丈夫じゃない……」

「わかった」

黎はそう言つと、お姫様抱っこをしてきた。

「な、なななな！何すんだよ！」

「布団の所までだ、我慢しろ」

「でもよー！」

「でもないやない 危ないだろう」

「重いだろ！」

「重くない」

全て真顔で言葉を返してくる。

「でも！もう平気だし！」

「心配してるんだ！それともそんなに嫌か！？」

「恥ずかしいんだよ！」

（あ…叫んだら…なんか…）

「隗？ おい、大丈夫か！？」

「ダメ…だ…」

「隗！」

コンコン コンコン コンコン

ガンツ

「はっ！」

またか……。つか、さっきまでののは夢……？

「開けるぞ！」

扉を叩いていたのは黎。と、言うことは……

扉が開けられる。

「寝れたか？」

夢じゃなかった。

「もうグッスリだ」

「それは良かった 卵粥作ったから」

確かにいい匂いがする。

「ありがとう」

「また運んでやろうか・」

「遠慮する！」

「ははは 顔真っ赤だぞ 可愛いやつ」

「う……」

（可愛いなんて、言われたことないぞ！）

「じゃあ、手つなごう」

「は？」

「いつ倒れてもいいように！」

「ああ……」

顔を真っ赤にさせながら黎の手を握ると、黎が握り返してきた。

リビングに着くと、美味しそうな卵粥がテーブルの上ののっていた。

「じゃあ、口開ける」

「何言ってるんだよ！自分で食べる！」

「恋人らしいだろ？いいから開ける ほら！」

素直に開けると、ちょうどいい温度で、しかも美味しい卵粥が口の中に入ってきた。

「どうだ？」

「黎、お前プロか！？上手だな！」

「よかった……」

安心してゐる黎を見ていると、思わず笑んでしまう。

「なんだよ」

「いや、黎も可愛いなって」

「お前ほどじゃない」

「何言ってる……！」

「冷めるぞ？あーんしろ」

こんな時間がずっと続けばいいのに。

そう思いながら、隗は食べていた。

「うー、ごちそうさま！ありがとう、黎！」

「どういたしまして じゃあ 皿洗ったら帰るから」

「え……」

（そうか……もう7時30分だしな……）

「わかった」

「そんな悲しい顔すんな 毎日来てやるから」

「えっ!?!」

自然と悲しい顔をしていたらしい。

「隗」

「何？」

「風邪が治ったら、デートしよう」

「ええ！？」

「嫌か？」

「いやいやいや！嬉しい……」

「じゃあ、決まり」

デート……。初めてだなあ……。

色々と妄想していると、黎は皿を洗い終わっていた。

「じゃあな、隗」

「もうか！？」

「ああ、洗い終わったし」

「そっか じゃあ、今日はありがとな」

無理に笑いなが手を振っていたら、黎が顎を持ち上げてきた。

「隗 戸締りは忘れずに 後、ちゃんと風邪治せ」

「わかって……」

急に黎が顔を近づけてきた。

「デート 早くしたい 今週の土曜日にしたい」

「は？希望？」

「それまでに3日ある」

「ああ、うん」

「わかったな？ そしてその日にやりたい」

「は！？どこで！？」

「デートコースは映画 昼食 俺の家だ」

「家族は！？」

「俺は一人暮らし」

同じだったのか……。まあ料理が上手い理由がわかった。

「じゃあ それまで口にキスおあずけ」

「ってことは……」

隗の想像通り、黎は額にキスしてきた。

「今度こそ、じゃあな」

ドアが閉まる。

「初デート……か」

隼は生きていた人生の中で一番嬉しいという感情を持った。

「さあ 寝るか」

ゆっくり寝たからか頭の痛さは消えていたのでぐっすり寝れた。
土曜日までに治るようお願いながら……。

風邪引き（後書き）

なんだかほんわかしてしまいましたね。

担任登場！そして初デートの約束！

この話はけっこうゆっくり書きました。なので今までの話より長い
です；

感想、お待ちしております。

後、隼達の話と相威達の話を交互に出して！という希望などもお待ち
しております。

怒り（前書き）

今回は相威視点です。

怒り

朝目覚めると、蓮の家……。

「おはようございます、相威君」

そして蓮の声、と言う事は、昨夜ヤツたのか。俺達。

「今何時？」

「午前7時37分ですよ？」

「は！？なんで起こしてくれなかったんだ！」

急いで制服に着がえる。

（朝飯食べられない！）

「いや、気持ちよさそうに寝てたもんですから……」

「いつてくる！」

「いつてらっしやい」

相変わらずの笑顔で相威を見送る蓮。

玄関で靴を履いているとき、相威は不覚にもこんな事を思ってしまった。

（いつてらっしやいのキスとかしないのかな）

思わず手が止まる。

そして、何考えてるんだ！と、我に返った後、後ろから足音がしてきた。

「忘れてました」

そう言うと、蓮は相威の口を塞いだ。

「なっ!?!」

「さあ、いつてらっしやい」

何やってんだよ！と思いつつ相威は顔が笑んでくる。

「いつてきます！」

笑顔が満開になる前に、すぐに玄関から出た。

蓮の家から学校へは走って約30分。学校の予鈴は8時15分に鳴る。

「ギリギリかもな」
絶対に遅刻はしたくないので、いつも自分の家では6時に起きるよ
うにしているのだが……。
疲れて7時40分頃まで寝てしまったのだろうか。
（予鈴までに行かないと……！）
そう思い疲れながらも走って学校へ向かった。

「相威！問4やれ！」

「え？」

「え？ じゃないわい！ホラ、顔洗って来い！その後すぐにやれ！」
「は……はい！」

なんとか予鈴までには着いたのだが、どうやら授業中寝てしまっ
らしい。

（隗じゃないんだから……）

何気なく隗を見てみると、やっぱり寝ていた。

「コラ！隗、お前も洗って来い」

（ひやはは、いい気味……ってええ！？）

これじゃあ水道の前で二人つきりだ。

どうしよう、どうしようと考えているが対処法はない。

そして、やっぱり二人つきりになってしまった。

空気が重い。

（さっさと洗ってさっさと戻ろう）

そう考えていたのに、隗が話しかけてきた。

「ごめん」

「……は？」

何謝ってんだ、こいつは。

「黎の事が好きだって黙ってて」

「どうでもいいよ、じゃあな」

すぐに顔を洗い、その場を立ち去ろうとする。

「相威！話しかけちゃダメか？」

「自分で考えてみるよ！今まで話しかけた事なんかあったくせに、急になんだよ！」

隗の目が見開く。

……イライラする。

忘れようとしているのに、なんで話しかけてくる。

幼馴染の関係に戻ろうたって、無理だ！

放課後、また隗が話しかけてきた。

「話が……」

「俺、用事あるから」

わざと冷たくする。

「相威！何イライラしてるんだ」

隗の彼氏が何か言ってきたが、あえて無視。

「相威！」

「彼氏様が何の御用で？さっさとデートしてるよ！」

走って教室から出る。

（なんなんだよ！仲良くなんかしたくねえ！）

そうだ、蓮の家に行こう。

あそこに行けば、全て忘れられる。

紅茶でも淹れてもらって、気を落ち着かせよう。

でも、相威はさらにイライラする事になるのだった……。

蓮の家に着き、チャイムを鳴らさずにドアを叩く。

でも、蓮は来ない。

「いないのか？」

（でも、今日休みて……）

買い物でも行ってるのかな。

そんな予想をし、公園で暇を潰そうと思ったら、蓮がいた。

蓮！そう叫ぼうとしたが、叫べなかった。

「誰だよ……」

公園で見たもの。

それは、ベンチの上で座っている、蓮と知らない女性だった……。

怒り（後書き）

変なところで続いた…！

すみません；蓮が浮気！？みたいになってますが、勘のいい皆さんはもうお気づきでしょうかね。

次回、どうなるのか！？次回も見ただけだと嬉しいですよ。

感想、希望などお待ちしておりますので、ぜひよろしくお願ひします。

嫉妬？好き？（前書き）

前回の続きです。

嫉妬？好き？

「誰だよ……その女アマあ！」

（はっ！思わず叫んじやったよ）

その叫び声に蓮が気づいたらしく、顔を後ろに向けてきた。

（俺を見ている……！？）

「さん、ちょっと待っていてくださいね」

さつき名前を言ったようだが、上手く聞き取れなかった。

どんだん蓮が近づいてくる。

「なっ！何だよ！このっ」

「浮気ではありませんからね」

言う前に言われてしまった。

「でっ……でも！なんか思いつき楽しんでそうだったし？なんか後姿からして美人っぽくね？」

「仕事友達ですよ」

「さあ、どうだろうな！お前なら女に手だしかねないし！」

蓮の顔が歪む。いつもニコニコニコニコしているくせに……。

「そんなに信用できないんですね」

なんだかトゲのある言い方で言ってきた。

「なっ……なんだよ！」

「……信じられませんか？」

「証拠がねえ！」

「相威君、だからあの女性ヒメは仕事友達で……って……相威君嫉妬してるんですか？」

……嫉妬！？

嫉妬ってなんだ！？意味がわからない！

「なワケないだろうが！バーカア！」

「安心して下さい、本当に仕事友達で相談を聞いてるだけなので」

「だから！嫉妬じゃないからな！絶対！」

「じゃあ、後10分ぐらいで終わるんで、家の前で待っていてください」

「……わかった」

(嫉妬：なのかな 確かに女と蓮が一緒にいて腹が立ったけど)

約10分後

「すみません！待たせてしまいましたね」

「……うん」

「？ どうかしました？」

「嫉妬なのかなあって」

「あはははは！」

なぜか急に蓮が笑い出した。

「何笑ってんだよ！」

「いや、可愛らしい」

「はあ！？」

絶対蓮は俺を子供扱いしている。

子供……。

「蓮は、大人の女性のがいいのか？」

「いきなりなんですか？」

「つーか、俺なんかでいいのか？本当に俺の事好きか？飽きてないのか？俺、迷惑じゃ」

心が不安定なとき、どんどん不安という言葉が心を支配してくる。

(イライラの次は不安かよ……)

「俺なんか嫉妬してくれる人を好きにならない訳ないでしょう？」

顔が熱くなる。きっと真っ赤なんだろうと考えると、とても恥ずかしいので、咄嗟に顔を隠した。

「さあ？部屋に入って？」

「……ああ」

顔を隠しながら入る。

蓮が玄関のドアを閉めた瞬間、蓮が相威の口を塞いできた。

「んん……！？」

突然の事にビツクリした。

唇が離れると、蓮はニッコリとした顔をしながら、

「証拠がないといいましたよね？なら、証拠を体で表しますよ」

「はっ？……んう……」

今度は口を塞がれた後、舌を入れてきた。

ざらり、と舌が絡めあう。

「ッ……」

キスを続けながらも、巧みな手つきで服を脱がしてきた。

いったい、どこで習ったん……だって……そうか。

「お前、前の奥さんとヤツたことあるのか？」

蓮の動きがピタツと止まる。

「ないです」

「は？」

こうキツパリ言われると、拍子抜けしてしまう。

「キスがありましたよ、結婚式で」

「なんで、一回もか!？」

「はい、だから安心してください 器用なだけですから」

「なっ!?!??」

どうやら考えていたことは透かされていたらしい。

「どうせ な結婚でしたから」

「は?もう一回っ……あ!」

聞きなおそうとしたが、急に胸の突起をいじってきた。

ニコニコとした顔でやられるので、恥ずかしい!!

「お前……っく、その顔!」

「ああ、なんでいつもニコニコしてるんですかって事ですね?」

「ん……っああ……そう……」

「感情を隠しやすいからです」

「え……?んっ!」

いじるのをやめたと思ったら、今度は丁寧な形にそって舐めてきた。

そして、空いている手でズボンを脱がしている。

「ちよっ……ん……」

あっという間にズボンと下着は脱がされ、自身に指が絡まっている。触れられるだけでも感じてしまうのに、指を上下に動かしてきた。

「っ……んああ……や……」

「もっどっちも硬くなってますね」

「う……うるさい！っはあ！」

（だめだ……もう！イク……）

「イきそうですね、なら」

そう言つと、今度は自身を舐めてきた。

「バツ……！我慢できなく……んう……」

「そうさせてるんです」

「だ……ダメだあああああ！」

白濁が、蓮の顔を汚す。

「ご、ごめん！」

「いえ、イッてくれて嬉しいです」

白濁を指ですくっている。

「変態か……！！……？？」

「ええ、まあ」

「肯定すんな！……っひっ」

白濁まみれの指を、相威の窄まりに入れる。

「さあ、慣らしましょう 早くしないとつらいです」

「ん、ああああ……」

（またイきそうだろうが……！）

「っん……はあ……ああ」

喘ぎ声が止まらない。

決してワザとではない、自然とでてしまうのだ。

相威の中で蓮の指が動き回る。

「あ……あっ……うんっ……」

（恥ずかしい……）

「相威君」

「なっ……んだ……よお……」

「いれますね」

「っは！？あああああああ！」

こうして、相威と蓮は長い長い夜を共に過ごした。

くおまけく

「っーか、蓮 お前、前の奥さんとどう知り合ったんだ？」

「ああ、親が結婚しろ結婚しろとうるさいので、お見合いです」

「お……お見合い！？」

「はい、無理矢理結婚みたいな感じだったので、手をだす気になれないし、なんか仲悪くなっちゃったんで」

「ああ、そうですか……」

嫉妬？好き？（後書き）

なんだか…まとまってないという悲劇orz

そうそう、この話は隗たちがデートした後の話になってます。

デート編は次回です。楽しみにしていただければ光栄でございます。
そしてそして！感想、お待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5511h/>

恋獄-レンゴク-

2010年10月10日01時19分発行